

菅原文子

郡山女子大学

目的. 住居の役目は外敵から身を護り、安全でなければならないと言うのが原則であるが、住居学、建築の分野では計画上の住まい方、構造上の安全のみが主流であって住居の内部に住む人の思考や福祉について深く拘わって来なかった。住居の本来の目的を考えることについて哲学的、思想的背景についての一考察を述べる。

方法. 文献による

結果. 住家というものが人間の哲学、思想上にどのような影響を与えるか、住家を得ることが人間の本質のすべてであると言える。このような観点に立ってみると、従来のように二次元的な平面計画やインテリアでなくその居住空間の中で人間的な生活、外部の仕事から解放された休息、家族の団欒などの人間生活を護る空間をひとつの側面から見るとはならずそこでどのような思索や哲学的思考が生まれるかを考えねばならない。

戦災、震災で家を失った人々、ホームレスの人達は住むということから見放され本来の人間の生活の中で考えたり休息することができない。また、福祉の面からも要介護者に対して十分な空間、設備を得られない現実がある。手摺り、段差の解消だけではない。

かつて、住居が雇用者から与えられていた時代があるが、産業革命や日本の炭住、戦時中の徴用工員など労働力の確保が目的であって福利施設ではなかった。従って面積設備ともに健康を維持するのに十分なものではなく、満足すべき住居とは言えなかった。

安全とは耐力的に十分な構造を満足させ、ただ覆いがある雨露をしのげればよいというものではなく精神的な満足を得られるものをいう。家庭は満足すべき住居を得て初めて成立するものであることを十分に認識しなければならない。